

〔論 説〕

マックス・ヴェーバーの『倫理』論文における
内面的孤独化と『天路歷程』の口絵

荒川 敏彦

1. 単独の個人の内面的孤独化

マックス・ヴェーバー (1864-1920) の『プロテスタンティズムの倫理と資本主義の精神』(以下『倫理』) は、「資本主義」の起源論ではなく、「資本主義の精神」の形成を宗教的側面に限定して探求した書である⁽¹⁾。そのことは、この論文の末尾近くでヴェーバー自身が述べた結論からも明らかである⁽²⁾。曰く、「近代資本主義の精神の、いやそのみでなく、近代文化の諸構成要素の一つ、すなわち天職理念 (*Berufsidee*) を土台とした合理的な生活態度 (*die rationale Lebensführung*) は——この論稿はこのことを証明しようとしてきたのだが——キリスト教的禁欲の精神から生まれ出たのだった⁽³⁾」。『倫理』で問われたのは、この一文の主語である「合理的な生活態度」がいかなる宗教的動機によって形成され駆動されたかであって、その分析の核心には、「天職 (*Beruf*)」理念とともに、来世での救済か滅亡かはすでに定められているとする「二重予定説」があった。しかもその教説そのものではなく、それが一般の平信徒たちに及ぼした作用、とりわけカルヴィニズムの平信徒たちに及ぼした内面的な衝動 (*Antrieb*) の理解が問題とされたのである⁽⁴⁾。

予定説は、来世での運命は神によって事前に決定され、一度決定されれば人間の行為によってそれを変更することはできないとする、一貫した神中心の教説である。この「悲愴な非人間性」を帯びた教説が当時の真面目な信徒たちに及ぼした作用としてヴェーバーが看取したのは、個人化であり、孤独化という事態であった。

この悲愴な非人間性をおびる教説が、その壮大な帰結に身をゆだねた世代の心に与えず

-
- (1) 荒川敏彦『「働く喜び」の喪失——ヴェーバー『プロテスタンティズムの倫理と資本主義の精神』を読み直す』現代書館、2020年、17-18頁。
 - (2) 100年以上経った現代もなお『倫理』を資本主義の起源論として読もうとする欲求がある状況を踏まえれば、この点は繰り返し確認しておくべきだろう。
 - (3) Max Weber, 1920, "Die Protestantische Ethik und der Geist des Kapitalismus", *Gesammelte Aufsätze zur Religionssoziologie I*, Tübingen: J.C.B.Mohr (Paul Siebeck), *Max Weber Gesamtausgabe*, Abteilung I, Bd.18 (MWG I/18), Tübingen: J.C.B.Mohr (Paul Siebeck), S.484-485. (=1991, 大塚久雄訳『プロテスタンティズムの倫理と資本主義の精神』岩波書店 (岩波文庫), 363-364頁)。以下では、全集版 (MWG I/18) と大塚久雄訳『倫理』(岩波文庫版) のページ数について略記する。ただし訳文は適宜変更した。
 - (4) 予定説の衝撃によって、自らの救いを「確証」することが重要となってくる。天職、予定説、確証の3つがそれぞれ深く関連していることについては前掲拙著で述べた。

にはおこななかった結果は、何よりもまず、単独の個人のかつてみない内面的孤独化の感情 (ein Gefühl einer unerhörten inner *Vereisamung des einzelnen Individuums*) だった⁽⁵⁾。

ここでヴェーバーは、ただ信徒の孤独化を強調したのではない。信徒たち一人一人を現世の共同体から離脱した単独の個人として、その孤独化を強調している。注目されているのは、一人一人がもはやそれ以上には分解され得ない個 (Individuum) となる過程であり、たった一人で神の前に立つ存在であることを自覚していくその内面的動態なのである。ひとたび運命が決定されれば、信徒の「孤独の道 (die Straße einsam)⁽⁶⁾」の歩みに助力を与えることは他の何者をもつても不可能だという思想、すなわち牧師も、 sacrament も、教会も、神さえも助力できないという思想は、信徒の孤独をいっそう深化させる。そこにキルケゴールの「単独者 (der Einzelne)」の思想の系譜を見出すこともできるだろう⁽⁷⁾。ただしそれは、ヴェーバー思想との関連というよりも、ヴェーバーが『倫理』で分析の対象とした近世のカルヴァン派信徒の内面形成の延長線上においてである⁽⁸⁾。

永遠の生命か、永遠の遺棄か。救済のみを語る単一予定説と異なり、滅亡をも語る二重予定説が生真面目な信徒に及ぼす衝撃は計り知れない。「カルヴィニズムにとって、救いのためには真の教会に所属することが必要であるにもかかわらず、神との交わりは、深い内面的孤立化 (Isolierung) のなかで行われた⁽⁹⁾」というように、「真の教会」への所属は必要条件であって、現世的紐帯を断ち切った単独の個人が救いを得る十分条件ではない。究極において、人間は孤独な存在となったのである。

2. 『倫理』論文における『天路歷程』

二重予定説がもたらす作用は、内面的孤独化とは限らない。論理的には、二重予定説は「運命が決まっているなら、なるようにしかならない」と自暴自棄の生活態度を招来することもあり得るし、逆に、悲観的で隠遁的な個人主義を招くこともあり得るからである⁽¹⁰⁾。そうであるなら、16世紀後半から17世紀にかけての生真面目なカルヴァン派信徒の心情をどのように理解し、記述することができるだろうか。そこでヴェーバーは、当時ベストセラーとなった著作に着目したのである。

カルヴィニズムにとって、救いのためには真の教会に所属することが必要であるにもかかわらず、神との交わりは、深い内面的孤立化のなかで行われた。この独自の態度のもつ特殊な作用を感得しようとするなら、ピューリタン文学の中でももっとも広

(5) MWG I/18, S.278.(=大塚訳『倫理』, 156頁)

(6) MWG I/18, S.278.(=大塚訳『倫理』, 156頁)

(7) 『倫理』では、この「単独の個人の内面的孤独化」を強調した記述の次の段落でキルケゴールの「単独者 (der Einzelne)」についての言及がある。ただしそれは1905年の初出時にはなく、1920年の改定によって加筆された記述であることには注意が必要だろう。MWG I/18, S.294.(=大塚訳『倫理』, 167頁)

(8) 近代人の運命という観点からは、ヴェーバー自身もこの系譜に連なるといえる。

(9) MWG I/18, S.286.(=大塚訳『倫理』, 159頁)

(10) MWG I/18, S.282-283.(=大塚訳『倫理』, 163頁)

く読まれたバニヤンの『天路歷程』において、〔主人公である〕「クリスチャン」が「滅びの町」に住んでいることを意識して、一刻も躊躇せず天国の都への巡礼に旅立たねばならないとの召命 (Ruf) を聞いたのち、彼のとった態度の描写を見るべきである。妻子は彼にとりすがろうとする。——しかし、彼は指で耳をふさぎ、「命、永遠の命！」⁽¹¹⁾と叫びながら、野原に駆け出していく。根本において (im Grunde) ただ自分自身を問題とし、ただ自分の救いのみを考えるピューリタン信徒たちの気風を描き出したものとして、どんなに洗練した筆致も、この獄中に筆をとって宗教界の好評を得た鑄掛屋 [=バニヤン] の純真な感覚におよび得ないであろう⁽¹²⁾。(強調は引用者)

この一節に先立ってヴェーバーは、ダンテの『神曲』とミルトンの『失樂園』を、カトリック的精神とピューリタンの精神の比較として取り上げている⁽¹³⁾。その上で、続く第二章の序盤で、今度はミルトンとバニヤンを引いた。この重層的な比較が重要である。まずカトリックとプロテスタントとを大きく対比し、それを経た上でプロテスタントの内部を、予定説に批判的になって⁽¹⁴⁾アルミニウス派に近づいていったミルトンと、最後まで厳格なカルヴァン派的バプテスト (striker calvinistischer Baptist)⁽¹⁵⁾であり続けたバニヤンを例に対比する。こうして比較を重ねながら、カルヴィニズムの精神的態度のありよう⁽¹⁶⁾を絞り込んでいくのである。

その際、同時代のベストセラー——しかもその後も読まれ続け古典となった作品——によって例証する方法にも注目したい。そこでの考察対象は、時代は初期近代の、階層は王侯貴族や聖職者や学識者ではなく一般平信徒の、しかもその行為の外的結果ではなく規律化した行為へとつき動かすに至った内面の動きであった。資料的裏づけが困難なこの領域をいかに把握し、記述するか。この難題に対してヴェーバーは、文学作品とりわけ出版当初から広く好評を博した作品を資料としたのである。それは、宗教的達人たるカルヴァン

(11) ヴェーバーは1905年の初版ではドイツ語訳で „Leben, ewiges Leben“ と記していたが、1920年ではバニヤンの原文に戻して英語のまま „Life, eternal life!“ に書き換えた。

(12) MWG I/18, S.286-287.(=大塚訳『倫理』, 159頁)。これに続く『天路歷程』と他の著作との比較(ケラー、リグオリ、マキャヴェリ、ヴァーグナー)を通した理念型構成については、すでに構成された理念型を素朴に受容するのではなく、どのような観点から理念型を構成しているのかという理念型の構成局面を捉える上で重要であるが——その問題を仮に〈理念型化〉と呼んでおく——、紙幅の都合上によりここでは割愛し別稿に譲る。なお〈理念型化〉については、拙著『「働く喜び」の喪失』(現代書館, 2020年, 139-140頁)でも簡単に触れておいた。

(13) MWG I/18, S.250-251.(=大塚訳『倫理』, 129-131頁)。『神曲』と『失樂園』(および『天路歷程』)を扱った理念型の構成については、藤村俊郎「ヴェーバーの『神曲』・『失樂園』対比を透視する——《倫理》論文読解のための一助説」『商学論集』福島大学経済学会, 2014年(第83巻第3号)が示唆に富む。藤村は、ヴェーバーが理念型を構成する際に用いる「対比論」に「主観的」な面が色濃いことを詳細に跡づけつつ、理念型構成における「〈論理的な倒叙法〉とでも呼ぶべき論述方式」に着目する。藤村, 上掲論文, 99頁。ただし本稿で問題にする『天路歷程』についていえば、一人で歩き続ける信徒の孤独な姿は『天路歷程』が出版された当初からその口絵に採用された場面でもあり、「内面的孤独化」の理念型として『天路歷程』の一人駆け出す主人公のイメージは、当時から読者に与えたイメージであったと考える客観的根拠はあったといえる。

(14) MWG I/18, S.272-273.(=大塚訳『倫理』, 151頁)

(15) MWG I/18, S.286.(=大塚訳『倫理』, 165頁)

(16) MWG I/18, S.272-273.(=大塚訳『倫理』, 151頁)

の『キリスト教綱要』だけからでは推し量れない、予定説をめぐる平信徒への広汎な作用——とりわけ「滅びの予定」の心理的作用——を知るためであった。ヴェーバーはそれを、貧しい鑄掛屋の家に生まれ育ち、必ずしも十分な教育を受けていなかった⁽¹⁷⁾にもかかわらず、かつてないほどの売れ行きを示した文学的傑作を通して描き出そうとしたと考えられるのである。事実『天路歷程』は、初版を出した1678年の内に早くも第2版を出し、以後毎年2回ずつ、各版10,000部を売り尽くしながら版を重ね、バニヤンの生前だけで11版を出すほどであった⁽¹⁸⁾。ラテン語によって叙述された聖職者や知識人の著作は、そもそも読者が特定の層に限られており、そのような影響力の広がりを読みとることは困難であろう。ヴェーバーが、バニヤンが「鑄掛屋」であったことをわざわざ指摘したのは、その描写が知識人ではなく平信徒の情感の現れであり、かつその著作が広く支持を得たということに、『倫理』読者の注意を促すためだったと考えられる。

さて先の引用にあるように、ヴェーバーは『天路歷程』の冒頭近く、クリスチャンが「滅亡の都」から逃げ出す場面に、カルヴィニズムにおける内面的孤独化の典型を見出している。ここでヴェーバーが指摘する孤独化は、孤独への過程なのであって、最初から単独の個人である者の孤独ではない。信徒が孤独になっていく過程は、それまで自らが埋め込まれてきた生活様式や働き方、生き方を固守する伝統主義から離脱していく過程と一体である。『天路歷程』の主人公クリスチャンは、聖書を読んで自らの住む町に下された「滅亡」の予定を知り、悩み、逡巡した末に、妻と子に打ち明ける。

ああ、愛する妻よ、かわいい子どもたちよ。お前たちの身内のこの私は、背にある耐えがたい重荷のため、もとより助かる見込みはないが、そればかりか、なんでも、われわれの住むこの都も、天から降る火に焼き払われるとのことだ。その恐ろしい滅亡の際に、私も、妻のお前も、お前らかわいい子どもたちも、みな一緒に惨めな最期をとげるだろう——何とかして遁れる道を（実はそれが私にもまだ判らないのだが）見つけて遁れ出さない限りは⁽¹⁹⁾。

(17) 『罪びとのかしらに溢るる恩寵』において、バニヤンはこう述懐している。「両親のいやしく取るに足らぬ身分にもかかわらず、わたしを学校へ上げて読み書きを習わせる気を、神はこの両親に起こしてくださった。」Bunyan, John, 1962, *Grace Abounding to the Chief of Sinners*, ed. by Roger Sharrock, Oxford.(=1969, 高村新一訳『バニヤン著作集Ⅰ』山本書店, 60頁)。

(18) 竹友藻風, 1953, 「解説」『天路歷程 第二部』岩波書店(岩波文庫), 316頁。竹友によれば、ミルトンの『失樂園』ですら初版(1667年, 1,300部)から再版(1674年)まで8年かかった(当時としては異例の成功であった)。竹友, 前掲書, 316頁(なお竹友は「9年」と記しているが8年の誤記と思われる)。

(19) Bunyan, John, [1678] 1966→2008, *The Pilgrim's Progress*, Oxford University Press(Oxford World's Classics), p.10.(=1951, 竹友藻風訳『天路歷程 第一部』岩波書店(岩波文庫), 43-44頁/ =1969, 高村新一訳『バニヤン著作集Ⅱ』(天路歷程)山本書店, 23頁)。以下では略記する。ところで、ここに引用した「家族への愛」の記述は『天路歷程』初版ではなく、第二版(初版の出版年と同じ1678年)における加筆部分である。同様に、家族についての質問と回答の別の箇所 p.51-52 (=竹友訳, 121-124頁/ =高村訳, 82-83頁)も第2版での加筆。このように家族を無礙に見棄ててきたわけではないという弁明が加筆であるという事実は、『天路歷程』の執筆当初の「原イメージ」において重視されたのが、主人公における家族への愛ではなく、一人で天の都に向けて駆け出す場面であったことを物語っているだろう。W.R.Owens, "Note on the Text", in *The Pilgrim's Progress*, Oxford University Press(Oxford World's Classics), 2008, p.xl.

妻子たち家族は、主人公の頭が狂ったのではないかと思ひ、嘲ったり、たしなめたり、無視したりする。それでも主人公クリスチャンは家族を憐れみ、家族が信じてくれるよう祈るのだが、救いの道が見つからず、いっそう不安が増し煩悶していく。ここにまず、信仰者が現世的紐帯から切り離される孤独がある。だがこの時点ではまだ主人公は家族とともに逃げる道を模索しようとしている。その道が見つからないが故の煩悶であった。

しかしエヴァンジェリストとの出会いと教えが転機となる。エヴァンジェリストが「なぜ泣いているのか」と尋ねると、クリスチャンは答えて「私の手にあるこの書物〔=聖書〕によって、私が死に定められており (I am Condemned to die), 死んだ後も裁きにあわねばならないのを知った⁽²⁰⁾」と述べる。滅亡の定めを聞いて、クリスチャンは底知れない不安に陥り苦しみ、途方に暮れている。そこでエヴァンジェリストが、遠くでキラキラ光るあかりを目指して進み、そこにある門を叩くように教える。ここに唯一の救いの道を見出したクリスチャンは、当初は家族一同が惨めな最期を迎えないで済むように「何とかして遁れる道を見つけ」ようとしていたはずだったが、救いの道を聞いた途端、突如そちらに向かって独りで、いまだ現世的生き方に執着する家族の声に一切耳を貸さずに一目散に駆け出してしまうのである。その場面を確認しておこう。

こうして私〔=『天路歷程』の語り手〕は夢の中で、その男〔=主人公クリスチャン〕が駆け出すのを見た。さて、かれがわが家の戸口から走り始めていくらも行かないうちに、妻や子どもらがそれに気づいて、戻ってくるように大声で叫び始めた。けれどもかれは指を両の耳にさしこんで「命、命、永遠の命！」と叫びながら走り続けた。こうして、かれは後ろを振り返ることなく、広い野原の真中目指して遁れ去った⁽²¹⁾。

この場面こそヴェーバーが、「根本においてただ自分自身を問題とし、ただ自分の救いのみを考えるピューリタン信徒たちの気風」と解釈した部分である。もちろん、見てきたように、主人公も最初から独りだけで救われようとしたわけではない。愛する妻や子どもたちとともに逃れたいと願っていたし、祈りもしたのである。それに対して、家族はまったく彼の言う滅びの予定を信じることはなかった。むしろ嘲り、相手にしなかった。

とはいえ、家族とともに残るか、それとも家族を置いて独りで逃げるかという二者択一を迫られたとき、究極的な決断の場面が問題である。主人公は、救いの道を知った途端に、根本において自分の「永遠の命」を求めて野原へ駆け出した。しかも、家族が後から戻るよう呼びかける声（現世的紐帯の誘惑）を、耳に指を突っ込んで聞こえないようにし、一目散に「滅びの町」から逃れ去った⁽²²⁾。ヴェーバーが目にしたのは、根本においてただ自分のみ (allein) を問題にする態度だったのである⁽²³⁾。

(20) Bunyan, 2008, *The Pilgrim's Progress*, Oxford University Press, p. 11. (= 竹友訳『天路歷程 第一部』岩波書店, 46頁 / = 1969, 高村訳『バニヤン著作集Ⅱ』山本書店, 24頁)。

(21) Bunyan, 2008, *The Pilgrim's Progress*, Oxford University Press, p. 13. (= 竹友訳『天路歷程 第一部』岩波書店, 47頁 / = 高村訳『バニヤン著作集Ⅱ』山本書店, 25頁)。

3. 大塚久雄訳『倫理』岩波文庫版のカバー問題

ここまで、二重予定説がもたらす平信徒の「内面的孤独化」の様相が『天路歷程』に描き出されていることを見てきた。ヴェーバーはこの主人公が家族との現世的紐帯を断ち切って、「滅びの町」から一人逃げ出す態度を、根本においてはただ自分一人の魂の救済のみを問題にするピューリタンの気風 (Stimmung) の例証としている。物語の終盤で、いよいよ天の都の門の前に到達し、前を流れる川 (= 死) を渡るといふ苦難に直面した際、天使は主人公たちに「助けることはできない」と告げる⁽²⁴⁾。最後の最後には、ただ自分一人で「川」を渡らねばならないのである。

しかし『天路歷程』の主人公の生き方を、滅びの町をひとり逃げ去った場面で特徴づけることは、どこまで妥当なのか。実際『天路歷程』の主人公は、その巡礼の途上のほとんどを独りではなく同行者とともに、信仰にまつわるあれこれの談論を交わしながら進んでいく。その過程は、必ずしも孤独とは言い切れない。

ヴェーバーの理念型論は、それが特定の観点からあえて論理的かつ一面的に構成されたものであるがゆえに、読者はつねにその構成のされ方を疑うことができるし、そこに新たな問題発見の可能性がある。理念型による記述を読解する上で、その理念型の構成があまりに「不当」であるなら、論述の説得力が失われてしまうだろう⁽²⁵⁾。では、この『天路

(22) そもそも予定説によれば、信徒がどのようにふるまうかとは関係なく、神が予定されたとおりに人間の運命は帰結するのである。しかし問題は、二重予定説の構造すなわち、それが救いと滅びの二項対立構造をもつがゆえに、つねに信徒に対して A か B かの二者択一を迫ってくることである。しかもたいていその片方はすでに滅びの道であり、実質的にはもう片方しか選ぶ余地はない。主人公クリスチャンは、エヴァンジェリストが示した「神の怒りから通れよ」という福音書の聖句 (マタイ 3 章 7 節) に従って、神の定めた道をその通りに進んでいるだけではないのか。信仰に関する人間の自由意志を認めない予定説に従えば、そのように考えることもできる。少なくとも、ヴェーバーが『倫理』でそうした生き方を称賛していないことは明らかである。

(23) この主人公の自己の魂の救済を中心とする態度は、たとえば自己の死よりも都市フィレンツェを重んじたマキャヴェリなど他との比較を重ねることで特徴づけられている。この点については別稿で述べたい。

(24) Bunyan, 2008, *The Pilgrim's Progress*, Oxford University Press, p. 148. (= 竹友訳『天路歷程 第一部』岩波書店, 312 頁 / = 高村訳『パニヤン著作集 II』山本書店, 232 頁)。

(25) おそらくこの部分を念頭に安藤英治は、ヴェーバーが『天路歷程』を歪め、主人公の人間像を作っているのではないかと指摘している。「ヴェーバーの叙述ではそもそも妻子を顧慮するところが全く欠けているように見え、そういう印象を与えようヴェーバーは文を作っているようにさえ見える。これは、イデアル・タイプだからということだけで済むことなのだろうか」「ヴェーバーの例のあげ方はどうも強引なところが気になる」。安藤英治『ヴェーバー歴史社会学の成立』未來社, 1992 年, 316 頁。理念型構成へのこのような懐疑は、理念型を実体化したり、理念型という方法を安易な「ヴェーバー擁護」の口実としたりしないためにも重要である。安藤はこれを「イデアル・タイプの陥し穴」と呼んでいるが、理念型を構成する局面に遡及することの重要性が指摘されていると言ってよい。

ただ『天路歷程』の例については、主人公にはたしかに妻子への顧慮があったが、それにもかかわらず、その思いを振り切って神の道に向かうことの内的葛藤にこそ注目すべきだと考える。そこには、ヴェーバーがしばしば引用する「マタイによる福音書」(10: 34-39) に見られるイエスの言葉、「わたしが来たのは地上に平和をもたらすためだ、と思ってはならない。……自分の家族の者が敵となる」という、現世的紐帯を断ち切るべしという教えの実践を見ることができる。ヴェーバーはここで、首尾一貫して福音に忠実な生き方 (Lebensführung) をカルヴァン派信徒の理念型として構成しているのである。

『天路歷程』についてのケースはどうか。

そのことを考えるため、いったんここで目を転じて、岩波文庫版『倫理』のカバーに注目してみたい。岩波文庫版カバーに記された紹介文は、一般に『倫理』の簡潔な要約として親しまれているだろう。しかし、そこには資本主義への関心が強く、信徒を突き動かしたエートスに関する記述が見られない。したがって表紙の紹介文は、本稿が冒頭で『倫理』の「結論」として引用した「合理的生活態度」の来歴を問う『倫理』の読解をミスリードする危険を孕んでいるのだが、本稿で注目したいのは、その紹介文の隣に掲載された絵である（図1）。



（図1）大塚久雄訳『倫理』岩波文庫カバー⁽²⁷⁾

の信仰心を想像することはできようが、この表紙に信徒の内面的孤独化を読みとることは難しいのではないだろうか。

この岩波文庫版『倫理』のカバーにあしらわれた絵は、たしかに『天路歷程』に由来するものなのだが、それは主人公クリスチャンが一人駆け出し巡礼となる「第一部」のものではなく、その続編である「第二部」に由来する絵と思われる。第二部は、クリスチャンの家族（妻と4人の子ども）がクリスチャンが天の都に旅立った後、後悔し、改悔し、それに共感した1名の女性同行者ととも亡夫クリスチャンの歩んだ道を進んで天の都への巡礼となる物語である。

別の箇所でも触れたが⁽²⁶⁾、この絵には文字で The Pilgrims Progress と書かれており、また遠景の都市には Destruction と書かれてあって「滅びの町」を想起させる。明らかに『天路歷程』に関する絵であることが見てとれる。

ここまで見てきたように、『天路歷程』は、ピューリタン信徒の内面を知る上で決定的に重要な史料として位置づけられている。それを踏まえるなら、『倫理』の表紙に『天路歷程』の絵を配することは慧眼といえよう。

ところが、ここで問題がある。『倫理』が問題にしたのは、『天路歷程』の主人公が陥った内面的孤独化であった。ヴェーバーはそれを予定説の作用と解釈した。しかし、この図1に描かれているのは、2人の女性と4人の子どもであって、単独の個人の内面的孤独化のようには見えない。

たしかに、一般平信徒らしき人びとが光を指さしてそちらへ向かって進もうとしている様子はうかがえ、そこからピューリタン信徒

(26) 拙著『「働く喜び」の喪失』、13-14頁。

(27) マックス・ウェーバー『プロテスタンティズムの倫理と資本主義の精神』岩波文庫（大塚久雄訳）、1989年。

『天路歷程』は「第一部」「第二部」とも、竹友藻風訳が岩波文庫から出ている。ともにその扉後ろには口絵がある。そもそも『天路歷程』は、語り手が夢のなかでクリスチャンやその家族が巡礼となって歩む道行きを見るという物語形式であり、1678年の「第一部」初版以来、その扉後ろの口絵には夢見る語り手と、天の都に向かって進んでいく巡礼とを描いた絵が置かれてきた。岩波文庫版『天路歷程』は、17世紀末の口絵を資料として掲げている(図2、図3)⁽²⁸⁾。

岩波文庫版(大塚久雄訳)『倫理』の表紙カバーにあしらわれたのが『天路歷程』の第二部の口絵であることは一目瞭然である。『倫理』の表紙で、眠って夢を見ている「語り手」を削除したのは、デザイン上の理由であろう。あるいは、眠っている人物がいると『倫理』の読解を妨げると判断してのことかもしれない。いずれにせよ『倫理』の表紙カバーに採用されたのは、『倫理』で言及された内面的孤独化の典型とされた『天路歷程』「第一部」の主人公クリスチャンの姿ではなかった。



(図2) 岩波文庫版『天路歷程』第一部の口絵⁽²⁹⁾



(図3) 岩波文庫版『天路歷程』第二部の口絵⁽³⁰⁾

図2から分るとおり、『天路歷程』「第一部」の口絵を用いれば——あたかも二宮金次郎を思わせる、書を読みながら歩く姿の——ひとり巡礼の道を行くピューリタンの孤独をシンボリックに示すことができたはずである。その「内面的孤独化」を表紙に描くことは、『倫理』論文全体のイメージを決定づけるだろう。それは、カルヴィニズムの二重予定説によって惹起された内面的孤独化をめぐる信徒の生き方=生

活態度の問題を中心に、宗教倫理の作用という点から『倫理』を読解するよう読者を案内することになるだろう。

ところがすでに触れたように、大塚久雄訳『倫理』は、岩波文庫版におけるその表紙カ

(28) 同様に『パニヤン著作集』(山本書店)も同じ口絵をそれぞれ配している。ただし「天路歷程」の口絵は『パニヤン著作集Ⅳ』(「天路歷程」の物語は『パニヤン著作集Ⅱ』に所収)、「続天路歷程」の口絵は『パニヤン著作集Ⅴ』の掲載なので注意を要する。また図柄はほとんど同じなのでここには引用しないが、第一部、第二部ともに初版の口絵はOxford World's Classics版で確認できる。

バーの紹介文において、予定説によって内面的孤独化に陥った平信徒が生活態度を合理化-規律化していくという論理展開を前面に押し出すことはない。それは岩波文庫版における大塚久雄の（読みやすく読者の理解を助ける重要な示唆に富んだ）「訳者解説」においても同様である。『倫理』本文で二重予定説によって内面的孤独化がもたらされるという指摘がなされる同じ箇所、ヴェーバーは脱魔術化（大塚訳では呪術からの解放）に言及しているのだが、「訳者解説」で「呪術からの解放」に触れる箇所でも⁽³¹⁾、あるいは「禁欲的プロテスタンティズム」という見出しが付され「カルヴィニズム」に言及される箇所でも⁽³²⁾、二重予定説や内面的孤独化が言及されることはないのである。

もちろん紙幅の限られた「訳者解説」であるから、記述が限定されるのは当然ではある。けれども、表紙カバーに『天路歷程』の口絵が採用されているにもかかわらず、『倫理』と関連する「第一部」の絵ではなく、むしろ家族がクリスチャンの後を追う「第二部」の絵を採った。そうすると、「訳者解説」で言及されていないこともあわせて、『天路歷程』めぐる扱いのちぐはぐさを感じざるを得ないのである。

さて、いささか回り道をしたが、確認しておきたいのは、『倫理』においてヴェーバーがピューリタンの内面的孤独化の理念型として『天路歷程』の主人公の出立場面を取り上げたことの妥当性である。

ここまで見てきたように、『天路歷程』の第一部の扉の後ろには、1678年の初版以来、聖書を読みながら独りで天の都を目指す主人公を描いたこの絵（図2）が口絵として採用されてきた。それは本文中に差しはさまれた多くの挿絵のなかの1枚なのではない。この絵（図2）が扉後ろに置かれた口絵であって、『天路歷程』を開いたときに最初に目に飛び込んでくる絵であることを思えば、家族の紐帯や世俗の楽しみを離れた孤独な巡礼の姿が、著者バニヤンが抱いた物語の核心的イメージでもあったと考えてよいだろう。そして17世紀の当時から、読む者にとっても、この口絵が『天路歷程』のイメージとなってきたと考えることは十分可能だと思われる。

(29) ジョン・バニヤン『天路歷程 第一部』岩波文庫（竹友藻風訳）、1951年。口絵の下に「1672年 第3版口絵」と記されているが、『天路歷程 第一部』の初版は1678年だから、これは明らかに誤りである。「第一部」岩波文庫版の本文中の挿絵では、一貫して1692年の第13版の挿絵を用いているので、この口絵も第13版のものではないかと推測される。とくにこの版の口絵はライオンが特徴的である。

ライオンというのは『天路歷程』第一部の口絵に描かれた夢見る語り手（バニヤン）の下にいる動物のことだが、この版（第13版か？）の「かわいらしい」ライオンの絵は他の版の口絵と異なって独特である。1678年の初版の口絵を含め他の版では、ライオンはよりリアルに恐ろしげに描かれている。

『天路歷程』の内容において、主人公が直面する数々の試練のなかに2頭のライオンが出てくる場面がある。巡礼は、このライオンを前にして襲われるのではないかと恐れるのだが、実は2頭のライオンは鎖につながれていて、2頭の中央を歩けば安全に通過できるようになっている。恐れをなして来た道を引き返してしまふ勇気のない巡礼は、ここで斥けられることになる。恐れにも二種類あり、「誤った恐れ」は滅びの道であり、神への「正しい恐れ」こそが救いの道であるとの教訓になっている。

(30) ジョン・バニヤン『天路歷程 第二部』岩波文庫（竹友藻風訳）、1953年。

(31) 大塚久雄「訳者解説」ヴェーバー『倫理』（岩波文庫）、396-397頁。なお、脱魔術化（Entzauberung）概念については、拙稿「脱魔術化と再魔術化」『社会思想史研究』2002年、を参照。

(32) 大塚久雄「訳者解説」ヴェーバー『倫理』、399-400頁。

4. 「増大」のモチーフ

大塚久雄訳『倫理』の岩波文庫版カバーに採用された絵が、『倫理』の内容にそぐわないことについて述べてきた。『天路歷程』「第一部」をどう扱うかは、二重予定説の作用を理解する上で、したがって『倫理』を理解する上で重要なポイントである。またこのテキストはそれ以外にも、中世以来の「神の記帳」の思想が強められた例証としても言及されているし⁽³³⁾、あるいは富裕になるためや顧客を多くするために信仰に入ったって構わないとする考え方の例証としても参照されている⁽³⁴⁾。このように『天路歷程』「第一部」は、『倫理』の中核に関わるテキストなのである。だからこそ、なぜ『天路歷程』の「第一部」ではなく「第二部」の口絵が採用されたのかは重要な問いであるはずなのだが、その答えは謎のままである。

しかし最後に、以上のミスリードを超えて、遺された妻子たちが主人公の後を追って巡礼に旅立ち、見事に天の都に到達する「第二部」がカバーの絵に採用されたことについて、あえてその意味を積極的に考えてみるなら、そこに「増大」のモチーフを読みとることができるだろう。

「第一部」の口絵(図2)と「第二部」の口絵(図3)の最大の違いは、描かれた巡礼の人数である。単独で巡礼者となった「第一部」の主人公に対して、「第二部」はその妻クリスティアナとその共感者、およびクリスチャン夫婦の間に生まれた4人の子どもたちが描かれている。しかも「第二部」では、クリスチャンの子どもたちがそれぞれ結婚して、さらにその妻が妊娠し、クリスチャンの孫が生まれる。こうして子孫が増え、クリスチャンの信仰の継承者が増加していく未来が暗示されている。

妻クリスティアナもクリスチャンと同様、巡礼の最後に天の都の前の「川」を独りで渡る。やはり最後の最後は、他の助けなしに単独で川を渡らねばならない⁽³⁵⁾。またクリスティアナが彼岸へと旅立つ一方で、子どもたちは此岸に残り、その地で教会の者が「増える一方(Increase)⁽³⁶⁾」であることが記されて「第二部」は結ばれる。

こうして見ると、『倫理』のカバーに採用されなかった『天路歷程』「第一部」の口絵に、滅びの町の子に突き動かされ内面的孤独に陥り、天の都を目指して過酷な巡礼へと駆り立てられる信徒が描かれているとすれば、「第二部」の口絵には、その規律化された生活態度を貫く巡礼の精神を受け継ぎ、かつその継承者を増加させていく第二段階が描かれていると考えることができる。

もとより、信仰者の増加はヴェーバーの『倫理』が主題とするものではない。しかし、増大(とくに自己目的的増大)というテーマ自体は、「資本主義の精神」の要点であった⁽³⁷⁾。

(33) MWG I/18, S.338.(=大塚訳『倫理』, 214頁)

(34) MWG I/18, S.478.(=大塚訳『倫理』, 355頁)

(35) ただしクリスティアナの最期は、大勢の人びとの温かな眼差しの下で見送られ、向こう岸には「門」まで付き添う馬や戦車が待っているという違いはある。

(36) Bunyan, 2008, *The Pilgrim's Progress, The Second Part*, Oxford University Press, p.290.(=竹友訳『天路歷程 第二部』岩波書店, 284頁/高村訳『パニヤン著作集V』山本書店, 232頁)。

(37) 『天路歷程』でもすでに、一度負った負債は永遠に返済できないという「神の記帳」の比喩や、マネーラヴ氏といった経済的利己主義者との論争など、信仰と経済との緊張が随所に見られた。

ヴェーバーは、時間は貨幣である、信用は貨幣である、だからその増大に努めよというフランクリンの金言を支えているのは、「自分の資本を増大させること (Vergrößerung) を自己目的として前提している利害関心への個々人の義務 (die *Verpflichtung* des einzelnen) という思想⁽³⁸⁾」なのだと述べている。

もちろん、二部にわたる『天路歷程』が「増大」を物語の中心に置いているわけではない。しかし、第一部から第二部への「口絵」を比較するなら、そこに神との交わりを媒介とした孤独な巡礼たちの「増大」が浮かび上がってくるのは疑いない。他方で『倫理』を見れば、その本論で取り上げられた『天路歷程』の内容は「第一部」のクリスチヤンの姿、すなわち単独の個人の内面的孤独化であった。それを踏まえて表紙カバー（岩波文庫版）にある家族が後を追う『天路歷程』「第二部」の口絵を見るなら、そこに「資本主義の精神」の出発点にあった、伝統主義から離脱した孤独な個々人の規律化した生活態度が広く支持を得て、追従し継承する者が次々と生まれ、組織立てられていく歴史的増殖過程を見るかのようである⁽³⁹⁾。それは「第一部」と「第二部」の口絵を比較して気づくことではあるが、大塚久雄訳・岩波文庫版『倫理』のカバーにあしらわれた絵は、その横に記された「近代資本主義の生誕」に焦点化した紹介文と方向性において一致しているといえる。それが「合理的な生活態度」の宗教的形成という問題が消去されている限りで、やはり『倫理』の理解という点では読者をミスリードしかねないものであることは、あらためて確認しておきたい⁽⁴⁰⁾。むしろ、このカバーの絵は『倫理』を発展的に読むための導きなのである。

〔文 献〕

- 荒川敏彦，2002，「脱魔術化と再魔術化——創造と排除のポリティクス」『社会思想史研究特集・歴史と思想のダイナミズム』藤原書店，26，49-61。
- ，2020，『「働く喜び」の喪失——ヴェーバー『プロテスタンティズムの倫理と資本主義の精神』を読み直す』現代書館。
- 安藤英治，1992，『ウェーバー歴史社会学の成立』未来社。
- Bunyan, John, [1666]1962, *Grace Abounding to the Chief of Sinners*, ed. by Roger Sharrock, Oxford.(=1969, 高村新一訳「罪びとのかしらに溢るる恩寵」『パニヤン著作集 I』山本書店。)
- ，[1678] 1966 → 2008, *The Pilgrim's Progress*, Oxford University Press(Oxford World's Classics). (= 1951, 竹友藻風訳『天路歷程 第一部』岩波書店(岩波文庫)／= 1969, 高村新一訳「天路歷程」『パニヤン著作集 II』山本書店。)
- ，[1684] 1966 → 2008, *The Pilgrim's Progress, The Second Part*, Oxford

(38) MWG I/18, S.155.(=大塚訳『倫理』，43頁)。

(39) ヴェーバーが『倫理』においてカルヴァン派が示す高度な組織力の要素として重視したのは、人間的したがって被造物的な感情や紐帯を峻拒した(脱魔術化)、非人格的でザッハリッヒな隣人愛を実践する態度だったということには注意が必要である。MWG I/18, S.288-294.(=大塚訳『倫理』，165-172頁)。

(40) ただし孤独な個人の増加(それは生産者でもあり消費者ともなる)とその組織化、そして資本の増殖という視点から『倫理』を発展的に読み解くための示唆を与える点で、独自の意義をもつということではある。

University Press (Oxford World's Classics).(= 1953, 竹友藻風訳『天路歷程 第二部』岩波書店 (岩波文庫)／= 1969, 高村新一訳「続天路歷程」『パニヤン著作集V』山本書店。)

藤村俊郎, 2014, 「ヴェーバーの『神曲』・『失樂園』対比を透視する——《倫理》論文読解のための一助説」『商学論集』福島大学経済学会, 第83巻第3号。

竹友藻風, 1953, 「解説」『天路歷程 第二部』岩波書店 (岩波文庫)。

W.R.Owens, 2008, “Note on the Text”, in *The Pilgrim's Progress*, Oxford University Press(Oxford World's Classics).

Max Weber, 1920, “Die Protestantische Ethik und der Geist des Kapitalismus”, *Gesammelte Aufsätze zur Religionssoziologie I*, Tübingen: J.C.B.Mohr(Paul Siebeck), *Max Weber Gesamtausgabe*, Abteilung I, Bd.18 (MWG I/18), Tübingen: J.C.B.Mohr (Paul Siebeck).(=1991, 大塚久雄訳『プロテスタンティズムの倫理と資本主義の精神』岩波書店 (岩波文庫)。

(2021.9.30 受稿, 2021.11.16 受理)

〔抄 録〕

マックス・ヴェーバーの『倫理』論文において、平信徒にたいする二重予定説の作用として指摘された内面的孤独化の典型とされたのは、『天路歷程』「第一部」の主人公が巡礼に立つ場面であった。岩波文庫版『倫理』では、そのカバーデザインに『天路歷程』の原書にあった口絵が採用されている。しかしそれが『天路歷程』の「第二部」であることは、『倫理』の内容と大きく齟齬を来している。二重予定説の作用による内面的孤独化を表現しようとするなら、内容に沿って、『天路歷程』「第一部」の口絵（主人公が単独で巡礼している絵）がふさわしい。しかしカバーに採用された「第二部」の口絵は、「第一部」の主人公が天の都に到着して後、回心した家族（妻と4人の子ども）が巡礼に出る場面が描かれており、『倫理』とほとんど関連がない。二つの口絵を比較することで「増大」のモチーフ（子孫や信仰共同体の増大と、資本の増加）を読み込んで新たな解釈を展開することも可能であるが、『倫理』読解という点では注意を要する点である。